日本留学時代におけるサイチョンガ文学論考

―浪漫的激情と啓蒙思想

エルドンバートル

はじめに

物みなは歳日と共に亡び行く。
ひとり来てさまよへば
流れも速き広瀬川。
何にせかれて止むべき
憂ひのみ永く残りて
わが情熱の日も暮れ行けり。（注①）

この頃になって、故郷の蒙古のことを思うたびに、今から九十年前、日本の大詩人萩原朔太郎が西洋模倣により近代の商業都市に変わりつつあった前橋への郷愁を詠嘆した、この「物みなは歳日と共に亡び行く」という詩をくちずさむのが私のくせになっている。それは、そこに一個の言霊が躍動していて、おそろしい予言を感じさせるからであろう。

蒙古の歴史で見れば、一二〇六年、チンギス・ハーンがアジア・ヨーロッパを跨る大蒙古帝国を創建し、一三六八年に蒙古元朝が漢民族の明朝によって倒されてから、蒙古民族の歴史は異民族の搾取、掠奪、圧迫に苦しめられ、破滅の運命を辿り始めたのである。一六三六年、清朝建立後、蒙古はその王朝に統治され、二百余年にわたり運勢の下り道を歩んだ。一九一一年、中国の辛亥革命により、清朝が倒れ、中華民国が生まれた後、全蒙古地域で民族権益・自由・独立のための革命運動が興ったが、ロシアと中華民国の統治意識を孕んだ条約・圧力によって、内蒙古と外蒙古の二つに分かれ、外蒙古はロシアの援助など国際的外因もあって、一九二一年十一月十八日、中華民国からの独立を宣言して、哲布尊丹巴活仏を元首とする君主国を樹立し、一九二四年蒙古人民共和国に変容した。内蒙古は中華民国の軍閥の支配下に陥り、「内蒙古人は駐屯開墾、土地占領の災難に浴びられた」のである。（注②）

その開墾の地積は、当時の内蒙古の綏遠地区だけの状況を見ても驚くほどであり、一九一二年から一九一三年までは一千二百三十四頃（頃は中国の地積の単位、一頃は百畝）で、〇・六%を占めていたが、

一九一四年から一九二八年までは、十一万八千九百三十二頃で、五十九%を占めるようになった。（注③）

一九二九年に入ると、中華民国の開墾・土地掠奪は残酷をきわめ、その上、河北省、山東省、陝西省などの内地から大勢の漢人を入植させ、移民による民族同化政策を実施したのである。その結果、昔から蒙古人が遊牧していた多くの土地は、内蒙古に設置された民国の知県衛門の命令で移住民に与えられ、数多くの遊牧民はやむを得ず他郷を流離することになった。殊に、漢・蒙雑居の地域では、蒙古民族の伝統的生活様式・風俗習慣・言語文化は著しく変質して、チンギス・ハーンの大蒙古帝国時代からの遊牧文化は「亡び行く」兆候を呈してゆくわけである。

上記のような歴史的原因と、それに日本・ロシアの東部内蒙古をめぐる抗争など民族の興亡に関わる出来事が内蒙古人の民族滅亡の危機意識を引き起こし、生存のために立ち上がる抵抗運動を促した。一九二二年～一九二三年の、呼倫貝爾（ロシアと外蒙古に隣接する、内蒙古の東北地域）の郭道甫、福明太らの指導による全蒙古民族の人民政治を建設することを主張する独立運動、一九二九年十一月の、東部内蒙古哲里木盟ダルハン王の補佐官であったガダメリンの統率する蒙古民衆の武装蜂起、一九三〇年～一九三一年の、西部内蒙古のオルドス地方における組合運動という民間の武装蜂起などが相次いで起こったのだが、結局、民国軍閥によって鎮圧された。

だが、民族を救うとするその精神の続きとして展開されたのは一九三三年から一九四九年までの内蒙古自治運動である。徳王の指導下繰り広げられたこの運動は、蒙古近代史上、特に、後の内蒙古体制の形成及びその発展に極めて重要な影響を与えたと言える。

この運動の切り離すことのできない活動に、当時の日本留学生を代表とする蒙古青年たちの、文化教育の振興を以て蒙古を復興させる壮業に貢献するとした絶え間ない努力がある。その一人がサイチョンガであり、日本留学中、詩歌、日記体散文など多くの文学作品を書いている。内蒙古現代民族文学の基礎は彼によって築き上げられたという評価は今日定説になっているのだが、彼についての従来の研究は、敗戦後、つまり一九四五年十二月、彼が蒙古人民共和国（今日の蒙古国）に留学して、マルクス・レーニン主義の思想を接受して創作された、社会主義傾向の文学に集中している。彼の日本留学中の翻訳、或いは生前発表されていない作品の収集といった研究も近年来なされてはいるものの、日本留学中の彼の思想を具体的作品に即して、または当時の内蒙古独立・自治運動の歴史的・社会的環境に真正面から向き合って考察・解釈する研究は欠けている。もし彼の文学を当時の内蒙古の特殊な政治状況、蒙古人の蒙昧弱化などの実態と切り離して見れば、その文学自体の中身から離れた実体のない観念が生まれるわけである。

日本留学時代における彼は、「中国各民族人民の最大の敵である日

本帝国主義と蒙古民族を裏切った封建階級の統治勢力に抵抗せず、文化教育・啓蒙と改良を以て民族を救うことを幻想していた」、『心の伴侶』に表現される思想は「小資産家階級の知識人の幻夢と哀傷である」という従来の評価（注④）は階級理論的偏見であり、文学を国家意識のわくぐみの中に強引に押し入れ、「Aでなければ B である」という風な形而上学的思考方式にとどまっている。何を書くかは作家の自由であり、作家は他者に振り回される宣伝の旗手ではない。または、彼を「小資産家階級の知識人」であるというのも事実にあわない空説であり、実は内蒙古自治政府の責務と期待を負う官費留学生として日本へ渡った遊牧民の子としての知識人であった。

何故蒙古民族は奮闘に立ち上がったのかについて、徳王は一九三七年一月一五日の『蒙古新報』に次のように宣言している。

民国時代に入ってから蒙古と中華民国は平等条約を結んだのに、民国は日増しに我が蒙古民衆の権益を奪い取り、その残酷非道極まりない。その故、我が蒙古民衆は勇み立ったのだ。

確かに、当時は日中戦争の残酷な時期であったものの、蒙古民族の「最大の敵」は、既述のように、駐屯開墾、土地掠奪、民族同化など非人道的統治政策を強行し、蒙古を滅びの瀬戸際に押し出した中華民国の軍閥であった。

ここで、話はサイチョンガの文学に移るのだが、「わが蒙古が滅びの危殆に瀕した今日、日本に留学する絶好の時機に恵まれた我々蒙古の青年たちが命をかけて民族のために力を尽くさなければ、我が蒙古は何時復興されよか」と彼はその日記体の散文『砂漠、我が故郷』に書いている。日本の先進文明を受容して、世界の先進民族より文化的に立ち遅れ、権威・圧迫などに盲従する当時の無知蒙昧な蒙古民衆を啓蒙して、自民族の現状を改善し、民族精神の文化的更生、蒙古民族の自由・独立のため奮闘する志向が彼の日本留学時代における文学の主調音である。

「啓蒙とは、人間が自己の未成年状態を脱却することである」「未成年とは、他者の指導がなければ、自己の悟性を使用し得ない状態である」「ところでかかる啓蒙を成就するに必要なものは全く自由にほかならない」とカントは言っている（注⑤）ように、一民族にとって見ても同じことが言える。自由・独立の精神が欠けている民族は、他者の権力意志に左右されやすい。特に危急存亡の時代にあっては自由と独立の問題は、一個人のことに関わるだけではなく、民族の問題でもある。その民族が恥辱、圧制を受けた時は、一人残らず一致団結して、民族の尊厳を守り抜くことにこそ一民族の自由・独立はあるのである。

この小論では、上述の問題意識を以て、サイチョンガの『心の伴侶』、『砂漠、我が故郷』など日本留学時代における著作をめぐって、

社会・歴史的背景に留意しながら分析・検討を進め、その実態を探ってみたい。

民族問題は世界史において極めて重要な問題であり、二十一世紀の今日、経済グローバリゼーションの波に乗って、ある弱小民族の文化がある強大民族の文化に同化されつつあることは周知のことである。内蒙古の今日の現状を見ても、近年来民族言語の喪失、遊牧的伝統文化の変質などの問題は著しい。移り変わりが速いこの世の中で、我々蒙古人は一体どのようにして自分たちの言語・伝統文化を守ればよいのかという思い、そして蒙古の青年たちが蒙古人の辿ってきた歴史を再認識して、歴史的教訓を玩味し、未来への展望を開けることに何等かの示唆を与えればという願いが本論を綴るもう一つの起因である。

一、社会的背景と留学経緯

蒙古近代史において、二十世紀前半期は蒙古民族の生存にかかわる極めて重要な時期である。既述の中国辛亥革命をきっかけに、全蒙古地域の範囲で民族権益、自由のための革命運動が興り、一九二一年十一月十八日に外蒙古は清朝・中華民国からの独立を宣言し、一九二一年活仏を元首とする君主国を樹立して、一九二四年蒙古人民共和国になった。しかし、内蒙古は、中華民国の支配に陥り、軍閥らの駐屯開墾、土地掠奪、移民による民族同化など非人道的統治が以前より残酷非道になり、内地から大勢の漢人を入植させ、内蒙古人の存在状態は一変した。民国の知県衛門が各地にできるようになり、刑法・租税などの権力はほとんど漢人の手に移されたのである。そして、蒙古人の牧場としていた土地は漢人が司る県の命令で移住農民に与えられ、多くの遊牧民はやむを得ず他郷を流離うようになった。漢・蒙雑居の地方では、一部の蒙古人は固有の生活様式を捨て、漢民族のそれに変化するようになり、風俗習慣も漢民族化され、蒙古語すら忘れるようになって来た。当時の内蒙古人の言語喪失・伝統文化の変質について、『支那及満蒙』では次のような記述がある。

> 蒙古人傳統のテントの家は支那風となり、傳統の牧畜は農耕と變化し（略）、これ等の地方は人口として支那人の數が多く、蒙古人は多人數の支那人村落のうちに僅少の人數で生活して居るから、常に支那人から壓迫を加へられ、馬鹿にされるやうになつたから小さくなつている。これが爲めいつも彼等は支那風をなし、支那語を話し、自分は蒙古人でありながら自ら僞つて支那人であると云つて居る者もある。（注⑥）

亡びるか、それとも生き残るかという民族の運命を決定する、以上のような情勢に対応して、一九二二年～二三年の間、呼倫貝爾の郭道甫、福明太らは、「蒙古青年党」という地下組織を作り、全蒙古民族の独立した人民政治を建設することを主張し、一九二八年独立のため

立ち上がったが、東北軍閥軍に鎮圧され、それが失敗に終わった。（注⑦）一九二九年十一月の、東蒙古哲里木盟ダルハン王の補佐官であったガダメイリンの統率する蒙古民衆の武装蜂起、一九三〇年～一九三一年の間、西部内蒙古のオルドス地方で興った組合運動という民間の武装蜂起も同じく民国軍閥によって鎮圧されたのである。だが、一九三三年の春、西部内蒙古の王様であった徳王は全蒙古自治運動を起こし、彼の指導下で内蒙古の民族自治・独立運動が続いてきたのである。一九三四年一月、この運動の初めての組織的運営機構である蒙古地方自治政務委員会が創立され、一九三六年五月に蒙古軍政府、一九三七年十月には蒙古聯盟自治政府が成立した。

一九三七年は、内蒙古自治運動の歴史において極めて重要な時期であり、運動方針の転換期でもある。この頃から徳王は、政治的・武力的闘争をすると同時に教育文化を以て民族を振興する道を摸索し始め、「蒙古が衰弱している原因は、教育の時代遅れであり、蒙古を振興させるためにはまず教育から着手しなければならない。」（注⑧）と主張し、民族の独立のための人材を育成することに力を入れた。これが、民族の素質を高め、民族文化を保全して自民族を救おうとする上層階級の人士・知識人たちの広範な支持を得て、自治運動は一層進められたのである。こうした動向に従い、蒙古軍政府が成立した後まもなく初等教育、中等教育、高等教育など三段階の学制が制定され、西部内蒙古の各盟・旗・県・市に多くの学校が創られ、蒙古振興の一環として大勢の官費留学生が日本へ派遣されるようになった。もちろん、徳王政府の教育・留学生策略の施行には、日本軍部の対蒙古教育方針、または当時「満洲国」に属していた東部内蒙古の日本への留学生派遣などの情勢が絶好の機会を与えたに違いない。東部内蒙古では、一九三四年十二月、関東軍参謀部の「臨時蒙古人指導方針」により、蒙政部が開設され、各地から優秀な学生を選び、日本へ留学させるようになったのである。その「臨時蒙古人指導方針」の中には「教育を普及して、特に指導地位にある人々に必要な教育を与え、その素質を高めるために必要な教育施設を設けるべし。」と（注⑨）強調されている。

一九三六年十月、蒙古軍政府教育署は日本善隣協会の協力で第一期官費留学生として十人をそれぞれ慶応大学医学部、盛岡高等農林学校農学部、東洋大学教育部、東京高等師範学校、善隣高商特設予科、陸軍師範学校などに送った。そのうち、東洋大学に送られたのがサイチョンガである。

サイチョンガは一九一四年二月、今の錫林郭勒盟（当時の、察哈爾省）正藍旗の遊牧民の子として生まれた。彼は、地元の小学校を卒業してから一九三六年三月、察哈爾蒙古青年学校に入り、そこで日本語などの科目を修学した。この学校に在学中『蒙古秘史』、『チンギス・ハーンの箴言』、『智慧の鍵』、尹湛納希の『青史演義』（長編歴史小説）など蒙古の歴史、古典文学に接触し、「我々は知識に励み申すべ

し」「教育文明と暮らし」などの習作を作っていたらしい。（注⑩）

一九三七年四月、日本へ渡り、善隣協会において一年間日本語をマスターして、翌年に東洋大学教育部に進学したのである。履修科目としては、哲学、教育、道徳、歴史、経済、日本語、英語、体育などがあり、近代教育をシステム的に学んだわけである。その傍ら、近代日本文学に接触し、北原白秋、武者小路実篤など日本の作家たちの著書、または日本語を通してロシアのプーシキン、トルストイ、ドイツのハイネ、イギリスのバイロン、アメリカのホイットマンなどヨーロッパの小説家・詩人たちの作品を数多く耽読し、その文学の道程を正式に歩み始めたのである。

政治・経済・思想・科学・芸術の各方面において、西欧文化を摂取・移入して、文学も、伝統的な精神風土の上で、西洋の近代思潮を取り入れ、急速に近代化されていく日本の実相を、その目で見、耳で聞いて体験したことが彼の精神構造の形成に大きな役割を果たしたに違いない。

二、浪漫的激情

一九四一年、サイチョンガは『青旗報』（注⑪）、『丙寅』（注⑫）などの新聞雑誌に発表された三二首の詩歌を収録して、その処女詩集『心の伴侶』を東京にて出版した。戦乱などの事情により、サイチョンガに関する多くの資料は紛失し、これらの詩歌の初出年月、及び『心の伴侶』が東京のどの出版社から出版されたのかは不明である。本論では、一九八七年五月に初めて国内に公開出版された『サイチョンガ』という本に収められた『心の伴侶』をもとに検討する。この詩集は、「自然の公園・文化の都―日本」、「宿望の泉」、「砂丘の霧」、「成吉思汗の血を引く蒙古激情」、「雑歌」など五部の詩歌から構成され、第一部の詩歌には、「麗しき富士山」「東京市」「山寺」「友情」「夢の松島」「利根川の記」などの六首があり、日本の自然風景を賛美し、その文化・科学の進歩を羨望する心情が歌われている。第二部の詩歌には、前途に光明を見出そうとする願望、自由への憧憬、弱小の蒙古のために勇み立とうとする蒙古青年たちへの呼びかけなどの情緒が、優美な詩行の中に織り込まれている。第三部の詩歌には、故郷への思いが歌われ、第四部の「成吉思汗の血を引く蒙古激情」という表題の詩歌には、成吉思汗の勇武の精神を以て民族を復興させようとする意志が歌われている。第五部には、「籬下の若草」「憤激」「花姫」などの詩が収められている。

その峰に白雪光れり
仙境の美名世に知れ渡る
国中万人の心に輝く
麗しく富士よ、神々しい山。

雲霧そのふところにけぶれり
周りの山々その下に仰ぐ
清き五湖周囲に広がり
万人の憧れる神聖な山

空中に聳える神々しい山
雷もそのふもとに鳴り
永遠に白雪の衣をまとう
山の王様、富士山麗しい。（「麗しき富士山」）

『心の伴侶』の第一部「自然の公園・文化の都―日本」の最初に置かれたこの詩に続いて、「東京市」詩には、東京駅、日比谷公園、銀座通り、新宿の街、靖国神社、明治神宮、神田町、上野公園、浅草などの美しく、にぎやかな名所の風景が描かれ、往来する電車、仕事に急ぐ人々、学業に励む書生、朝日の輝きを浴びて、その喜びを歌う女たちの幸せな姿に憧れる心情が表現されているのだが、「四方の文明集う／東洋の名城、これが東京」という、名所記を連想させる書き方に留意するべきである。というのは、東京に象徴される近代日本の文明的繁栄に引かれる心の躍動が、組曲として後に続く第二部から第五部の詩群では危機意識を伴う暗い郷愁を基調とする心象に変わっていき、「自然の公園・文化の都―日本」に詠われているような近代日本の文明に鑑みて、故郷の蒙古を思案しようとする暗示的意図があるように考えられるからである。

防いでくれよ、光の窓
寒気を以てわが身を襲う夕暮れの風を
吹雪のように胸をむなしく吐く冷たい息を
蒙霧を以てわが魂を乱す夜の闇を
防いでくれ、光の窓よ

流してくれよ、わが家へ
憂鬱な心を明かす曙を
偉大なるわが宿願を灯してくれる輝く太陽の光を
知恵の啓蒙を覚めしてくれる新鮮な空気を
流してくれ、わが家へ・・・光の窓よ。

運んでくれよ、わが家へ
日照の恵みに芽生え立つ青草の匂いを
明月の光に微笑み開く美しい花の香りを
清澄な露に清まされ流れる早朝の空気を
運んでくれよ、わが家へ・・・光の窓よ。

（後略、「光の窓」より）

端的に言うならば、『心の伴侶』の「宿望の泉」と題する第二部に収められたこの詩は当時の内蒙古の社会・政治的実情を後景として書かれた作品であり、暗黒と光明、憂鬱と曙、蒙霧と啓蒙の対比によって民国軍閥の暗夜の如く支配・圧迫から解放され、太陽の光のような自由への祈願が暗示的に表現されている。「わが家」を「わが故郷」に置き替えて考えれば、「蒙霧を以てわが魂を乱す夜の闇」に戦慄する危機意識から来る祈願がもっと明らかに感じ取れるだろう。

古今に例の無し
我が先祖の精神
心もとに光れり
　成吉思汗の子孫たちよ
　今し勇み起とう
兄弟のように親しむ
アジアの種族
正義を以て振起すべし
　成吉思汗の子孫たちよ
　今し勇み起とう
（後略）

これは、「成吉思汗の血を引く蒙古激情」と題する第四部に収められた「成吉思汗の子孫たち」という詩の冒頭の部分である。初出は不明だが、彼が日本留学中の一九三七年から一九四一年の間に書かれたことは確かである。既述の民国の軍閥に蹂躙される内蒙古の歴史的背景、蒙古民衆の災難に浴びる暮らしなどと照らし合わせてこの詩を読めば、今すぐ勇み上がって闘わなければ、その民族は滅びてしまうだろうという憂患意識と、民族を復興させるという切望が、浪漫的激情を以て噴出しているように感受される。一見したところ、平凡な呼びかけの詩のように見られるのだが、細心に玩味して見れば、かつて世界を征服した先祖の成吉思汗時代を顧みて、世に落魄れている今日の運命を悟るべしという重みが連想の空間に隠されているように考えられる。

思うに、この詩において、その精神が蒙古人の「心もとに光れ」る「古今に例の無い」勇敢、賢明な先祖のチンギス・ハーンは、既述の「麗しき富士山」詩の「国中万人の心に輝く」「山の王様」である霊山—富士山と対称的に描かれ、連想の空間を読者に託して、歴史・社会的背景を後景に隠す書き方をしているように感取される。

「成吉思汗の血を引く蒙古激情」組曲のもう一首の詩には、チンギス・ハーンの精神を継承して、民族の為に精を出そうとする心願が次のように表現されている。

嗚呼、先祖のチンギス・ハーンよ

聖主のチンギス・ハーンよ
英明のチンギス・ハーンよ
願ってやまない。

天下の人々を震慄させた
あの雄大な威武をわが身に吸収し
永遠に衰えない精神と不敗の意志を以て
同族の為に尽力しようと
願ってやまない。

（中略）

嗚呼、先祖のチンギス・ハーンよ
聖主のチンギス・ハーンよ
英明のチンギス・ハーンよ
願ってやまない。

あらゆる種族、四海の民を
平等に慈愛したあの寛容の心を
わが胸に取り抱き
命繋がる衆生の為に尽力しようと
願ってやまない。（「願ってやまない」）

この詩は、古来から伝承されてきた、蒙古人の最も愛唱する次の祭祀の歌と主旨を同じくするものである。

大王の我テント中にましませし時
蒙古種属は勇にして恐るべかりき
其一動は全世界を跪かしめ
其一瞥は日の下のあらゆる国民を震わしめぬ。
大王よ、活きかえれ、おお大王！
如何に我等はまちわぶるよ。（「鉄木真への祈願」、注⑬）

言って見れば、チンギス・ハーンの意志・精神を以て、衰滅の方向へ下っていく当時の蒙古民族を復興させることは、蒙古人の共同の願いであった。

または、上述の「願ってやまない」と題する詩の「あらゆる種族／四海の民を平等に慈愛した／あの寛容の心を／わが胸に取り抱き／命繋がる衆生の為に尽力しようと／願ってやまない。」という末尾のスタンザに表現される思想は、一九三九年十月号の『丙寅』に発表された「六盤山」という彼の物語風の散文にも反映されている。

チンギス・ハーンの征服した管轄地域内では、イスラム教、仏教、基督教など各種の宗教があったのだが、それらの地域におけ

る民衆が望む通り宗教の自由を与え、（略）種族の偏見を取り除き、東西の多民族の交流を自在にした。（略）チンギス・ハーンの創立した蒙古帝国はアジアの諸民族を率い、全世界の差別無しの文化交流を推し進め、自由なる政治を執り行った。（略）日本、満洲、中国、インド、全アジアの種族よ、争いを止め、団結して、前途へ励もう、愚痴の闇を破り、深い眠りから目覚めよ。（「六盤山」より）

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と福沢諭吉（注⑭）が書いているように、誰でも人間としての権利が平等であり、各民族も同じであるという考え方はサイチョンガの思想意識の一面であったように考えられる。しかし、この考え方と裏腹に、内蒙古に対する中華民国軍閥の政策は蒙古民衆の権利を迫害する独裁的・ファシズム的統治であった。

一言すれば、危急存亡の瀬戸際に瀕している自民族への憂患意識とその民族を復興させるため、蒙古の若者たちが一致団結して勇み起とうとする心の叫びが『心の伴侶』詩集の主調音になっている。また、詩集の冒頭に「自然の公園・文化の都―日本」と題する詩歌を前景として置き、内蒙古に関する詩歌を後景にする構成自体が当時の蒙古読者に、自然公園の如く繁栄・自由の美しい日本に鑑みて、自分たちが置かれている移民・開墾、政治的・経済的圧迫の酷くなっていく社会環境を顧みてもらう狙いを暗示しているように考えられる。

三、啓蒙思想

一九四〇年七月十一日、サイチョンガは学校の夏休みで、察哈爾省（当時の西部内蒙古の一省）から日本に留学していた八人の学生と連れだって東京を発ち、七月二二日実家に着き、九月二日東京に戻っている。この五四日間の見聞を日日欠くことなく日記に留め、後に作品集として出したのが、日記体で綴った散文集『砂漠、我が故郷』である。その序文には、「聖なる成吉思汗歴の七三五年、日本国の東京市にて」と書いてあるのだが、何月のことかは不明である。七三五年というのは西暦の一九四〇年であり、一九四一年十一月、蒙彊徳王府印刷所から刊行されている。この散文集は主に当時の蒙古社会の実態、貧困災難に苦しむ蒙古民族の暮らしを写実的に描き、上層官吏の卑怯蒙昧を批判している。または、ラマ教の名義を借りて民衆を騙す僧侶たちの罪悪な行為を暴き、それを盲信する民衆の無知蒙昧な性向を痛感して、阿片に蝕まれ、飲酒に耽溺して心身的に衰弱していく蒙古人の状況にも蒙古民族の惰弱の原因を認めている。そして、所々に日本の主な都市の繁栄事情を紹介し、日本のような世界先進国の文明に立ち遅れている自民族を啓蒙して、振興させる祈願をこめている。

形式の面から見れば、この散文集は七月十一日から九月二日までの五十四章段からなり、章ごとの結尾、或いは中間において短長異なる

詩歌を詠んでいる。この書き方は、武者小路実篤の『自己を生かす為に』（新潮社、一九一九年）に収録された日記体散文に啓発された発想であるかも知れないという風に内田孝は推測している。（注⑮）確かに、サイチョンガは、武者小路実篤の『自己を生かす為に』に収められた「自分はもう」という作品を蒙古語に翻訳して、一九四二年六月『新モンゴル』雑誌に発表しているのだが、東洋大学在学中に日本の文学作品を数多く読んでいた彼は、歌物語の『伊勢物語』、『土佐日記』などの日記文学を知っていたはずであり、清朝時代の蒙古の著名な作家である尹湛納希の『青史演義』（長編歴史小説）などの章回小説（章ごとの後に詩を付ける形式）を読んでいたので、どちらの影響も考えられる。

この散文集について、作者自身が、「帰途におけるすべての喜びと悲しみを綴ったのがこの『砂漠、我が故郷』である。（略）この書物を読む蒙古の皆様は、目の前の蒙古民衆の危機と宿願を何時でも忘れず胸に懐き、不当のところをご指示することを望む」と書いているように、衰退していく自民族の現状に対する危機意識が彼の啓蒙思想の主な動力であっただろう。というのは、いずれの変革、揚棄も自己の存在状態に対する主体の焦慮、危機意識から生まれるからである。個人にしても、民族にしても、もし自己の存在状態に永遠に自己満足し、或いは無明の眠りにあれば、自己揚棄はあり得ない。

もちろん、サイチョンガの啓蒙思想の形成には、彼が留学していた近代日本の文明が重要な影響を与えたことは言うまでもない。東洋大学に履修科目として歴史も学んでいた彼は、日本近代化の経緯を知っていたはずである。

> 今日、高速で発展し、世界強国に数えられるようになった日本は（略）明治天皇のとき、文明開化の策略を執り行ったことにより、民衆の視野が広くなり、智慧が開き、（略）世の中を驚かす今日の成果を収めたのである。

これは、一九四三年頃書いた『我が蒙古強盛の歌』（文明評論風のエッセイ集、一九四四年四月、蒙彊徳王府印刷所から刊行されている。）に収録された「開化は尊い」という一篇の一節であるのだが、ここに言及される文明開化の思想は、既に『砂漠、我が故郷』を書く頃、彼の意識に芽生えていたと言える。一九四一年、日本在住の蒙古人会が「新文化を蒙古に導入し、蒙古の文化を振興させる壮業に役立てる」目的で、雑誌『新蒙古』を創刊する時、サイチョンガはこの雑誌の編集に携わり、歴史的文章の翻訳或いは自作を発表したりしていた。または、近代科学技術に関する文章も蒙古語に翻訳し、雑誌に出していた。内田孝の統計によれば、『青旗』の第九号～第二十五号に、『子供に聞かせる発明発見の話』（原田三夫著）など合計二一篇の翻訳作品が発表されているそうである。（注⑯）

世界文明に取り残され、「貧困・病気・無知」がその衰弱の「三大病根」（注⑰）であった当時の内蒙古民衆の知性開化の問題は、当時の日本留学生たちの共同の思慮であって、それがサイチョンガの『砂漠、我が故郷』に対比的意識の働きで表現されているように考えられる。つまり、文明の近代日本と衰弱の内蒙古との対比思考である。例えば、「七月十三日の日記」には次のような記述がある。

六〇、七〇年前頃から朝鮮のこの地域が乱伐で裸の山に変わっていたそうである。後に日本が朝鮮を統治してから、この地域の気候、地形、土質などについて細かく検査・研究を行い、それに適う各種の樹木を植え、人間の知恵、優れた腕前、強い体力を以て造林事業に励ましたお蔭で、今日のような緑したたる木々に囲まれたすばらしい自然景観が創られ、地元の人々に多大な利益をもたらしたのである。（中略）嗚呼、わが砂漠の故郷の仲間たちよ、先祖の時代から暮らしてきた富饒な故郷を裸にして食いつぶすしか知らず、懸命にして豊潤富麗な環境にすることを思案しないで怠けているのは先祖から授けた賜を無駄にしてしまうことではないか。（中略）こんな状態で蒙昧に麻痺していれば、どうやって生きられるのか。（略、「七月十三日の日記」より）

先祖の時代から遊牧して暮らしてきた蒙古草原が既述の開墾・移民定住などによって砂漠化されている内蒙古の様子を後景に置く、隠し縫いのようなこの書き方には、他人の顔を見て動くのではなく、自分から勇み起ち、置かれている苦境を改善しなければならないという批判意識が働いているのである。この日記体の散文集を綴る時、作者には、近代日本、文明の日本、強国の日本が後景として意識され、広い連想の空間を創りだしている。そこに当時の彼の精神構造の有様を感受することができるように考えられる。

『砂漠、我が故郷』で、注目に値するもう一つのことは、仏教に対する蒙古民衆の迷信への批判である。

皆様、我々は今よくよく考えてみよう。この官人の一家の盛衰にもかかわる今回の千元の儲けが一人の高僧の占いによって決められるとは、何と悲しい、何と憎らしいことだろう。わが蒙古の砂漠の故郷の多くの蒙古民衆はこのような無知迷信の害でその生計をダメにしているのではないか。

これは、八月十三日の日記の末尾の部分である。この日、サイチョンガは知り合いの官人の家を訪れていったが、官人は王氏という大工の漢人と新築のことで値ぎりのやり取りをしていた。結局、官人は牛車五〇台を千元で使わせることに合意したが、官人の兄貴である一僧侶が「これはだめ、何よりまず高僧に占っていただかなくちゃ」とい

うので、高僧に占ってもらったところ、ダメと言うので、官人は王氏との約束をやめたのである。

蒙古民衆のラマ教(喇嘛教)への信仰は、清朝時代に始まった、仏教を利用して蒙古を支配するとした清朝の政策に関わる問題である。これに関して、『実録中国踏査記・上海東亜同文書院大旅行記録』には、次のように記してある。

清朝国を立つるや武威を以て之を屈すべからず長城も居庸の堅関の彼等の一撃に対しては殆ど何等の用を為さざるを悟り陰険にして巧妙なる政策を取れり、即ちモンゴルのラマ教を篤く信ずるを利し鋭意奨励し一面に於いては彼等が関心を得ると同時に他面に於いては彼等をして過去及未来の問題に急ならしめ以て現在の栄華功名を思うの暇なからしめ同時に其平和神秘なる教義により彼等の剽悍殺伐戦を好むの性を和げ一挙両得の功を収めんとせり。（注⑱）

蒙古民族のもともとの宗教はシャマニズムであった。つまり、蒼天を信仰していた。元朝時代フビライ汗は漢民族の儒教・道教の影響を防ぐため、または、それぞれの宗教・文化を持つ多くの部族を一教のもとで統治するため、仏教をチベット経由で蒙古国教にしたわけである。当時、仏教は蒙古支配階級の間では影響力があったが、多数の遊牧民たちは依然として固有のシャマニズムを信仰していて、元朝の滅亡にしたがって、仏教の影響も姿を消してきたのである。（注⑲）

だが、長い歴史的騒乱を経て、蒙古が清朝の支配に入るようになると、清朝はラマ教(喇嘛教)を以て蒙古人の勇猛な性質を抑える政策を取り、その勢力は内・外蒙古に盛んになったのである。例えば、三人の男の子が生れた家なら、その二人を出家させるのが常だった。蒙古人の人口が減ったのもこれと関係ある。

以上の日記で、サイチョンガは仏教そのもの自体に対してなにも書いていない。その主旨の重点は仏教を盲信する無知にある。蒙古民衆はあらゆる盲信から目が覚め、世の中のことに正しい判断ができる文明的民になってほしいという願いがこの日記に暗示される。このような願いは、自民族に対する愛の情感から生まれるものだろう。

人間の最終の目的は先祖から子孫に受け継がれる自民族のために命を捨てて力を尽くすことにある・・・などの歌唱や話し、戦場に赴く勇士たちと祖国に残るその家族の人々のこのような、祖国と自民族を命を以て守り抜くとする誓いを耳にする度に、わが蒙古を愛する心が火のように燃え上がる。既述の様子を見ても日本が世界の強国の名誉を勝ち取った原因をすぐさま分かるだろう。確かに、一国或いは一民族の興亡はその民衆の、自民族を愛する心の強弱に関わる。（略「七月十一日の日記」より）

これは、帰郷の際、東京駅で戦場に赴く兵士たちが見送られる場面を目の前にして綴った作者の激動する心の声である。ここには、一般に言う侵略戦争に従事する日本軍人への嫌悪の気持ちは見られなく、感受されるものは自国のために、自民族のために戦おうとする兵士たちの精神への共感、「火のように燃え上がる」「蒙古を愛する心」である。当時の内蒙古の自治運動の状況から考えてみれば、蒙古民族の一員としての彼の心情は理解されるだろう。

彼は一九四三年頃書いた『我が蒙古強盛の歌』（文明評論風のエッセイ集）に収録された「文明開化と生計」という文章の中に、「外国の優れた文化を移入して自分のものにし、自分たちの智慧、腕前、体力を頼りにして、輝かしい新しい文化を創ることは我々の将来の偉業である」と主張している。既に日本留学時代から、科学文化によって民衆を啓蒙し、民族復興の事業を進めることが構想されていたように考えられる。その意識の後景に日本の明治維新の構図があったはずである。

おわりに

文化が喪失すれば、その民族は滅びる。二十世紀前半期は、蒙古民族にとって、勇み立って戦うか、待ち惚けて亡びるかという、その運命に関わる極めて重要な時期であった。既述のように、清朝が滅亡した後の蒙古民族は外・内と二つに分けられ、外蒙古は独立したのだが、内蒙古は中華民国の統治に陥ったのである。軍閥らの駐屯開墾、土地掠奪、移民による民族同化など非人道的統治が以前より残酷非道になり、蒙古民衆は水火の難に遭遇し、曾て遊牧文化が本流であった内蒙古は遊牧民と定着民が混在する異相の地区となったわけである。

こうした情勢のもとで、蒙古人は民族の自由・独立のため、武力闘争、政治手段などあらゆる対応策で抵抗した。一九三七年から西部内蒙古に於ける自由・独立運動の指導者である徳王が、政治的・武力的闘争をすると同時に教育文化を以て民族を振興する道を摸索し始め、民族の独立のための人材を育成することに力を入れた。その呼びかけで、西部内蒙古では、多くの学校が創られ、または、日本の先進文明を修得させ、蒙古民族の復興の壮業に貢献してもらう目的で多くの若者が日本に派遣された。それらの学生たちの中で、文学を以て蒙古民衆の眠れる精神を呼び覚まし、自民族の自由・独立のため尽力した青年の一人がサイチョンガであった。

既述したように、『心の伴侶』は彼が日本留学中に出版した処女詩集である。それは内蒙古近代文学史における最初の詩集でもある。その内容をかいつまんで言えば、危急存亡の瀬戸際に瀕している自民族への危機意識と、その民族を復興させるため、蒙古の若者たちが一致団結して勇み起とうとする心の叫び、浪漫的激情と言ってよい。

この詩集について、蒙古国の著名な作家であるバ・バストは、その回想文の中で「外国に留学して世界文学に出会った」「その祖国は自

由・幸せというものがなかった時代であった故に、詩行の後にその思想を隠していた。とにかくその『心の伴侶』の詩歌は彼の詩歌の頂点と見るのが理に当たる。」と高く評価している。（注⑰）

これは、要を得た公正な評価である。『心の伴侶』はその象徴性、暗示性や連想の手法をうまく操り、すぐれた知識人の危機感、郷愁、憂患などの情緒がその詩行に織り込まれて、芸術性は高い。内蒙古近代文学の基礎を作った詩集と言える。

また、日記体散文集『砂漠、我が故郷』も主に田舎の遊牧民たちの暮らし向きを写実的に描くすぐれた文章である。酒に呑まれ、阿片に害され、仏教を盲信する人々を目の前にして、彼らの不幸を憐れみ、不振を憤る思いが、彼の啓蒙思想へとつながっていくからである。

また、『砂漠、我が故郷』が章ごとの結尾或いは中間に短長異なる詩歌を詠んでいる点については、武者小路実篤の影響があるかも知れないと推測する内田孝の指摘（注⑳）に加え、彼は日本古典の日記文学を読んでいたと思われることや、留学する前に尹湛納希の『青史演義』などの章回小説（章ごとの後に詩を付ける）をも耽読していたという二点を考慮すべきであると考える。

『心の伴侶』と『砂漠、我が故郷』に感受されるもう一つの特徴的な点は、歴史・社会的背景を後景にして、広い連想の空間を読者に託す書き方をしていることである。例えば、本論で分析した「麗しき富士山」と「成吉思汗の子孫たち」、「光の窓」、「七月十三日の日記」などにそれが窺われる。

なお、サイチョンガの年譜、或いはその作品集の解説に、彼は日本の作家、ヨーロッパの小説家・詩人たちの作品を数多く読んでいたと紹介されるが、一体誰のどのような作品を読んでいたのかについては不明で、確実の資料も手に入らない。よって、この問題については、今後の課題とする。

注

注① 『萩原朔太郎全集　第一巻』、新潮社、一九五九年
注②⑧ ジャクチト・スチン『私の知るところの徳王と当時の内モンゴル』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、一九九三年
注③ 蒙古族簡史編著組『蒙古族簡史』、内蒙古人民出版社、一九八五年
注④ 斉木道吉、築一孺、趙永銑ら編集『蒙古族文学簡史』、内蒙古人民出版社、一九八一年
注⑤ カント『啓蒙とは何か』、篠田英雄訳、岩波書店、一九五〇年
注⑥ 佐藤義亮編輯『支那及満蒙』、新潮社、一九三二年
注⑦ ジャクチト・スチン『蒙古今昔』参照、台北商務印書館出版、一九五五年
注⑨ 島田俊彦・稲葉正夫編集『日中戦争』現代史資料8参照、美鈴書房、一九六五年
注⑩ 其布日哈斯、色・烏力吉巴図『納・賽音朝克図研究』、内蒙古文化出版社、二〇一六年
注⑪ 一九四〇年十二月十七日、興安局蒙民厚生会、蒙民裕生会、満州国総務庁、日本側の出資で、株式会社「青旗新聞社」が設立され、一九四一年一月六日（一九四五年七月三〇日廃刊）から『青旗報』（週刊）が発行された。蒙政部次長であった菊竹実蔵は社長を務め、蒙彊、

日本、朝鮮など国内外に発行されていた。

注⑫　『丙寅』については、一九二六年、北京蒙蔵学校の教師をしていた布和賀西格、呼和巴特尓らが蒙古文学会を創建し、同年その機関誌として『丙寅』を創刊した。学会の会員が投稿し、詩歌、小説、民謡、諧謔小品などの文学作品を載せていた。サイチョンガは一九三九年六月蒙古文学会の会員になっている。

注⑬⑱　滬友会編集『実録中国踏査記・上海東亜同文書院大旅行記録』、新人物往来社、一九九一年

注⑭　福沢諭吉『現代語訳　学問のすすめ』、三笠書房、二〇一〇年

注⑮⑯⑳　内田孝「サイチョンガにおける一九四五年以前の翻訳活動」、内蒙古大学紀要、二〇一七年五月号

注⑰　郭道普「蒙古問題講演録」、中国人民政治協商会内蒙古自治区委員会文化歴史資料研究委員会編集『内蒙古文化歴史資料』第三十一輯所収、内蒙古人民出版社、一九八四年

注⑲　チ・ダライ『蒙古史』参照、内蒙古人民出版社、二〇一〇年

付記　サイチョンガの作品の引用については内蒙古人民出版社『サイチョンガ』（一九八七年五月）に拠り、筆者が日本語に訳した。

キーワード：日本、サイチョンガ、留学、浪漫的激情、啓蒙思想